コミュニティの危機に立ち向かう

ARTIST FOCUS

アールパード・シリング　［P.16］

ハンガリーの演出家、アールパード・シリング率いるクレタクール『危機三部作』(2011年)は、それぞれ映画・オペラ・演劇と、異なる形式で表現されたシリーズ企画である。その第三部『女司祭』は、都会育ちの女優が演劇教師となり、民族問題に揺れる田舎町に赴任したことから起きる波紋を描いた演劇作品だ。生徒役には、ルーマニア・トランシルバニア地方でのワークショップに参加した子どもたちが扮し、劇中で自らの生活体験を語る。都市と地方の格差や価値観の断絶、日常生活に潜む差別意識や暴力……子どもたちの暮らす村の映像をも交えた舞台は、虚構と現実をないまぜにしつつ、地域が抱える課題をあぶり出す。

田舎に住む子どもにも、都会に住む子どもにも同様にチャンスは与えられているのか？
伝統と革新のバランスをとりながら、私たちはコミュニティを改善していけるのか？
近代の教育は宗教の教義的なアプローチをどの程度許容すればいいのか。
混乱するグローバル社会において、私たちは魂の平和を得ることができるのか……。

私たちは若い世代にどのような未来の展望を見せることができるだろうか？
さらに、彼らの視点が私たちの視点と異なる場合、どうすればよいのだろうか……。

『女司祭』の創作者として興味があるのは、日本の人々と私たちの経験がどのように似ていて、またどのように違うのか、すなわち、私たちは互いに何かを学ぶことができるのか、という点です。

—アールパード・シリング

photo：『女司祭ー危機三部作・第三部』クレタクール/アールパード・シリング　© Krétakör - Máté Tóth Ridovics

ARTIST FOCUS 02

プロセス・ワークによって、コミュニティの危機に立ち向かう

アールパード・シリング
Árpád Schilling

文：マイエル・イングリッド・ヘルガ
聞き手：TOKYO/SCENE
Text: Mayer Ingrid Helga
Interviewed by TOKYO/SCENE

© Krétakör - Máté Tóth Ridovics

子どもたちが投げかける赤裸々な問い

ハンガリーの演出家、アールパード・シリング率いるクレタクールが、3年の活動休止期間を経て発表した『危機三部作』(2011年)は、第一部が映画、第二部がオペラ、第三部が演劇という、異なる形式を用いた実験的な作品だ(註1)。地域に深く分け入り、地元の子どもたちとのワークショップによって作品をつくり上げていくプロセス・ワークの手法は、演劇という枠組を拡張し、新たな光を投げかける方法だと言えるだろう。

Q. ある一つのコミュニティの危機に遭遇し、従来の演劇とはまったく異なる演劇の上演のシステムを持つ『危機三部作』をつくりあげた動機は何ですか。

A. 私は、スペクタクル(演劇)が社会に与える影響、またその逆に関して興味を持っています。私は世界を覆う文化的グローバリゼーションを好みませんが、情報革命がもたらした利点は、私達の潜在的なつながりを気付かせたことにあると考えます。すなわち、私達は互いに支え合い、生活を共有している。

この作品創作にあたって私たちは、社会における最小の、けれど最も重要なコミュニティは、家族であるという点で合意しました。私たちは家族コミュニティの機能的な不備を観察することで、より大きなコミュニティにおける機能不全に光を投げかけるいくつかのディテールを見つけました。最も驚いたことの一つは、人工的なコミュニティであるはずの家族を、方法論だけで語ることができないということでした。そこには、どのコミュニティにもある、単純には理解できない何かがある。共通言語として私たちはそれを「魂」と呼ぶことにしました。私たちは、それが社会全体から失われてしまったものであると考えています。

Q. 作品のなかでは、コミュニティにおける宗教と芸術の葛藤が直接的に描かれています。あなた自身の精神生活あるいは日常のなかで、宗教と芸術の関係をどのように捉えていますか？

A. 私はとても敬虔なカソリックの家庭に生まれました。十代までは、教会の定める規範を守るように努力していました。両親への反抗、聖なるものへの冒涜や自慰について罪悪感を感じていました。その当時は、定期的に告白に通い、祈りを捧げたものです。しかし、教会にはコミュニティとしての機能がないと気づきました。他者の前でいかに自分を卑下しても、そこにはコミュニティとしての意味が存在しません。今日、私に信仰心はありませんが、相互愛というものは、どんな宗教的教義の寄せ集めよりも基礎的な集団原理であると考えています。個々の自由は尊重されるべきですが、同時に私たちは人類や自然環境に対する理解と責任を培っていく努力をしなければなりません。宗教の時代は終わろうとしています。私たちは宗教に代わる別の最小分母を探さなければなりません。私は人類がこの問題を解決することを願っています。

Q. クレタクールの上演システムでは、完成された作品を上演するだけでなく、そこへ至るプロセスもとても重視されています。こうしたプロセスと上演作品の関係性をどのように捉えられていますか？

A. もしもプロジェクトをほぼ何もないところから、つまり戯曲も劇団も存在しないなかから始めるとしたら、“個人”のディテールがより重要になります。私たちは、構成メンバーそれぞれがどこに所属し、何をすればよいかを理解している、

演劇集団・クレタクール

ハンガリーでは、社会主義体制が崩壊してから次々と新しい演劇グループが生まれては消えている。そのなかでもクレタクールは95年から17年間活動を続けているグループだ。クレタクール(Krétakör)という名前は、ハンガリー語で白墨(チョーク)の輪という意味を示す。白墨の輪は真実が裁かれる場所であるが、無常と再生のメタファーでもある。「円を描いて、その円に入れるだけの人数で何かをやる。終わったら白墨の輪を地面から消して、お互いと別れる」。新しい作品をつくる度にチームを集め、終わったら解散するというクレタクールの独自の運営方針がここにある。

© Krétakör - Máté Tóth Ridovics

真の創造的コミュニティをつくらなければなりません。14〜15歳のグループと創作を開始するとき、その教育的観点を考慮します。加えて、教師との相互協力も大切です。教師が、私たちが学生を支配しようとしていると感じたり、もしくは生徒が私たちと協働することを特権だと感じるようにさせてはなりません。子どもたちはこの公演が、ただ学校を堂々とサボるための方法ではなく、学校に代わる一時的、補完的な活動であると気付くはずです。彼らが勇気を持って、何百もの大人たちと個人的な経験を共有する対話の場に参加できたとき、このプロジェクトは成功です。私たちが目指すのは、参加者の子どもたちの世界を開かせ、鍵を与えることで、一人でも行動できるようにすることなのです。

「演劇」という枠組みを超えて

アールパード・シリングは1995年に劇団を立ち上げた後、ブダペスト演劇大学の演出家コースに入学し、大学に通いながらクレタクールを主宰した。その後、大学を卒業したシリングは、国立の劇場に就職するという選択肢もあったにも関わらず、アーティスト集団・クレタクールを続けることを決意する。

07年にはKrétakör Színházという名前から「劇場」や「芝居」、「演劇」という意味を持つszínházという言葉を消した。これはただの名義変更ではない。彼らは、「創造的な共同ゲーム」として、自らの活動内容を定義している。伝統的な演劇の全て(観客、俳優、演出家、作家、空間)を疑い、演劇の美的な機能よりは社会的役割を重視しているのだ。この時からKrétakör Bázis(=基地、根拠地)という名前を名乗るようになる。

Q. 社会的な危機に向き合う演劇の可能性とは何だと思いますか?

A. ヨーロッパの伝統において、演劇はフォーラムなのです。それは、社会の現状をよく知り、世論を支配する問いの数々を観客に向けて発する責任ある、社会的役割を担っています。今日、そうした役割を持つのは演劇だけではありません。インターネット、映像は大衆を解放し、人々を取り巻く環境をその脆弱性や不可逆性を含め、あるがままの状況として記録することを可能にしました。インターネットと映像が社会に与える影響は、演劇のそれをはるかに凌いでいます。これが、演劇が過去20年間、骨董品を並べる博物館同様に扱われてきた理由なのです。もし演劇が、現代的で率直で、そして真に迫ったあり方を失ったとき、一体何が残るのでしょうか? ——それは「今」です。演劇における最前線は、「今、ここ」です。私たちはあきらめてはいけない。演劇の新しい役割を探し求めなければならない——言うまでもなく、演劇と教育が交わる分野は未開拓です。私たちはジャーナリズムのように、観客を扇動するために出来事を描写するべきではありません。互いの目の前に立ち、問いを発するべきなのです。問いを発することほど難しいことはないのだから。

(2012年8月 メール・インタビュー / 翻訳:椙山由香)

アールパード・シリング(演出家)

© Krétakör - Máté Tóth Ridovics

1974年ハンガリー生まれ。95年、ブダペストの大学で演劇と映画を学ぶかたわら、クレタクール劇団を創立。98年 - 2008年にハンガリー国内外で数々の演劇賞を受賞するが、その成功の渦中に劇団活動を一時中止する。その後、新しい方針に基づき活動を再開し、ハンガリーやルーマニアの地方に住む若者たちとの協同製作を開始。2011年、その成果の一つとして映画、オペラ、演劇による『危機三部作』を発表、改めて注目を集めている。

女司祭 — 危機三部作・第三部
クレタクール
作・演出:アールパード・シリング

10月27日(土)〜10月30日(火)
於:東京芸術劇場 シアターイースト

© Krétakör - Máté Tóth Ridovics

都会育ちの女優が演劇教師となり、民族問題に揺れる田舎町に赴任したことから起きる波紋を描いた演劇作品。生徒役には、ルーマニア・トランシルバニア地方でのワークショップに参加した子供たちが扮し、劇中で自らの生活体験を語る。都市と地方の格差や価値観の断絶、日常生活に潜む差別意識や暴力……子供たちの暮らす村の映像をも交えた舞台は、虚構と現実をないまぜにしつつ、地域が抱える課題をあぶり出す。

註1 関連プログラム「F/Tテアトロテーク」:映画『JP.CO.DE— 危機三部作・第一部』 10/27(土)〜30(火) 於:東京芸術劇場 シアターイースト